池田時代の赤彦

宮川康雄

一

島木赤彦が明治三十一年三月、長野県尋常師範学校を卒業して最初に赴任したのは、北安曇郡池田町である。赤彦は、師範学校卒業の後は郷里諏訪郡に職を得ることを希望して就職運動を試みたが、首尾よくことが運ばず、池田町の小学校に赴任することになったのである。そして明治三十三年の五月、郷里の玉川尋常高等小学校に転任するまで二年余の間、この地で過ごしている。

師範学校の卒業式を終えて三月二十七日帰郷した赤彦は、池田への赴任に先き立って諏訪郡下諏訪町高木の久保田政信の養嗣子となり政信の長女うたと結婚、二十九日に披露の宴をすませた。赤彦の本名はそれでこの時からこれまでの塚原俊彦から久保田俊彦となった。入籍は五月一日である。まずこの結婚について、いくらか述べておきたい。

赤彦の結婚については、赤彦全集の年譜、明治三十年の項に、この年の四月に仮祝言を挙げたことが記されているとおり、長野師範在学中にすでに決定していたものである。その経緯については、赤彦の四男久保田夏樹の「父の入聟」(『赤彦病床記』昭和二三)という一文によっておおよそを知ることができる。

父入婿の経緯を誌すと、久保田家の近隣に通称山久なる屋号で呼ばれてゐる家[原]である。当時の当主を久保田庄三郎氏と言ひ、現在の当主作治氏の二代前、即ち祖父に当る人である。その庄三郎氏が生糸製造業を営んでゐた。庄三郎氏の妻しう氏と、浅茅翁の後妻みをとは姉妹関係で両家は、甚だ濃い縁戚であつた。さういふ間柄から、父の実妹田鶴は、庄三郎氏の家の多忙の折は、時々手伝に来て滞在してゐるといふ事が多かつた。丁度父が師範学校在学時代の頃のことである。

山久の家と私の家(久保田家)とは昔から極く親しい近隣同志であつた。私の家の北端には旧くから庭井戸があり、清烈で冷たい水が湧いた。当時の高木村の状態を言へば井戸のある家は僅々数へる程しかなく、私の家の井戸なども近隣十数軒の家々に朝夕ささやかながら其の恵沢を施してゐたのである。勿論山久の家もそのうちの一軒で、父の妹の田鶴も滞在中は屢々水汲みに来た。さういふことから丁度同じ齢頃であつたうたと懇意となり、娘同志の雑談から師範在学中の父のことが出て写真なども見せられた。当時私の家で養子を迎へねばならぬ事情にあつたから、当然父もその対象となつたものらしい。久保田家も塚原家も同じ諏訪高島藩士であり、それに庄三郎氏の妻しう氏の久保田家とうたに対する特別有力なる推薦もあつて、事は次第に具体的に進んで行つたものと思はれる。媒酌は高島藩の儒者土橋松軒であつた。

ここには縁談の始まったのは、赤彦が師範に在学していた時期というだけで何年のことか具体的な記述がないが、仮祝言を挙げたのが、明治三十年四月であるから、多分その前年あたりのことであったろうことが推測されよう。その後この縁談は順調に進んで、赤彦がこの地方でいう「出入初め」のために久保田家を訪れたのは、明治二十九年の十二月三十日のことであった。師範学校三年生の時である。それからさらに進んで、うたが赤彦の生家に「出入初め」をしたのは、翌三十年四月三十日である。『赤彦全集』の年譜に、この日「結婚、仮祝言」をなしたことが記してあるのは、当時の諏訪地方の慣習ではこれで縁談が成立したことになるからであろう。赤彦はかぞえ年二十二歳、うたは二十一歳であった。

次にこの縁談が成立した背後の事情について少しく考察してみると、赤彦は四男であり、すでに三兄武彦が亡くなっていたとはいえ、長兄泰蔵と二兄武彦が健在であり、いずれは分家して自立するか他家を嗣ぐかしなければならない立場にあった。一方久保田家では、当主の政信は子供としては女子が二人あるのみで男子がなかったので、養子を迎えて娘の聟とし、家を嗣いでもらわなければならない状況にあった。そして養子の職業としては教員であることを望んでいたのである。それというのは、久保田家は、代々諏訪高島藩に仕えた武家であると同時に政信の父の代までは四代にわたって寺子屋をひらき、近隣の子弟に教えて尊敬をあつめていた教育者の家筋であったからである。政信は、自分の代になって農業を専業とし、教育者の家筋を継げなかったことを残念に思っていたので、娘の聟には教員をと強く願っていたのである。じじつ赤彦が久保田家に入る前に一端同家の養子となりながら不縁となって去った者もいたのであるが、この人も小学校の教員であった。

縁談が成立した理由としては、このほかに、久保田夏樹の記しているように塚原家と久保田家が共に同じ高島藩の武家の家筋であったとか、特別に縁者の推薦があったとかということももちろんあったであろう。師範学校にまで進んでいた赤彦が二度めの養子となることをなぜ肯んじたかについては疑問がのこらないではないが、旧時代における家格は久保田家の方が上であったし、殊に経済面においてはるかに豊かであった。それらのことを考えると、当時としては、まずはバランスを保った縁組みであったということができるであろう。

さて結婚披露の宴をおえたあと赤彦は、妻を置いてひとり諏訪を発ち、任地池田町村に赴いた。池田尋常高等小学校の『学校日誌』によれば、四月三日から同校に出勤したことが知られる。

池田町村（大正四年以降池田町）は、長野県の中信地方の中心地である松本町から北陸の糸魚川に抜ける道筋に位置する北安曇郡の一村である。その主要部は、旧時代に北国西街道脇往還の宿場町となっていた所であり、池田町と呼ばれていた。この地は後に大糸線の電車が村の西を流れる高瀬川の向側を通過するようになってからはさびれてしまったけれども、赤彦の住んだ頃は旧宿場のおもかげをのこし、近郷での繁華地であった。とはいえ、この三月まで県都長野市で多くの友人と共に四年間の月日を過ごしてきた赤彦に、「乾燥無味ノ一古村」（太田水穂宛書簡、明治三一・四・三）と感じられたのは、もとより当然であった。このような気持はその後も続き、十月に師範生の時に同級生であった太田水穂が来遊し、三沢精英を交えて三人で歓談した際に、水穂といっしょに友人に送った寄書でも赤彦は「只憐む市外一歩を出づれば秋風落莫三畦の黄波遠く松本平

の長風に動き愁人をしてそゞろに懐古の情に沈ましむるあるを、こんな手紙をかくも久し振りにて浮かれたる故と御免被下度候長野の子らからも一月許手紙が来ぬ」（清水謹治宛書簡、明治三一・一〇・九）と、その寂しい気持を訴えている。

赤彦が池田町で最初に下宿したのは、街道に面する屋号を古久清（殿清とも）といった北原伝四郎の家である。郡立諏訪高等小学校を卒業してから育英会に学んだときまでの同級生で師範学校でも一年上級にいた三沢精英と同居することになった。池田の地に伝えられるところによると、師範生の時期にあまりに不羈奔放であった赤彦をひとりでおくことを心配した校長笠原徳重が、諏訪郡豊平小学校にいた三沢を同校に呼んで赤彦と同宿させ、看視役としたのであるという。けれども、三沢も師範学校に在学中、師範の形式主義的な教育に厭き、学年試験に際して白紙答案を提出したために明治二十九年三月退学を命じられた経歴の持主であった。この言い伝えが真実であるかどうかは疑わしい。

古久清では当時老女がひとりで暮らしており、赤彦と三沢はその世話を受けた。しかしこのあと程なくして赤彦は三沢と別れ、吉野屋という近所の旅館の二階に移った。この転居の事情と時期については必ずしも明らかでないが、あるいは妻のうたを迎えて新居を営むためであったかも知れない。しかし実際に赤彦がうたといっしょに新居を営んだのは、これより後、多分六週間の短期兵役をおえたあとのことであったろう。即ち五月二十一日松本町に出ていわゆる兵隊検査を受けた赤彦は、二十六日下諏訪高木の養家に帰り、六月一日からは高崎の第十五聯隊に入営している。除隊となって池田町に戻ったのは七月中旬、学校へ出勤したのは、七月二十一日以後のことである。この間新居を営む時日の余裕はなかったはずである。

赤彦が妻のうたを呼び寄せて新生活を営んだのは、除隊後吉野屋からさらに移った柏屋という家においてであったであろう。当時池田小学校の補習科の生徒であった窪田茂喜が、「若い奥さんと住まれた或る家の裏座敷」（「島木先生を語る」『山柿』昭和一三・一〇）と記しているのは、これであろうと思われる。この家はその頃の下町、現在の池田町一丁目にあったが、取り壊されていまはなくなっている。

池田町における新婚生活は、赤彦の浪費のため、うたにとっては、生活費のやりくりに追われる相当つらいものであったらしい。赤彦は師範生の頃の書生気分を抜け切れず、給料を得る身になった安心感も加わって、近所の茶屋によく遊びに出かけた。「池田にてうれしきものは小林と申す美少年と梅香亭の才三にこれあり候」（清水謹治宛書簡、明治三一・一〇・九）などと友人宛の書簡に記している。後に赤彦が人生の危機の一として結婚後の時期を挙げたのは、この時の自分の体験を省みたものであろう。

うたはしかし、赤彦の浪費にも憾みがましいことは言わず、家計の欠損は実家から送金してもらったり近所の人の縫物をして縫賃を得たりして補い、やさしく赤彦をつつんだ。それで生来情に脆い赤彦は、後にはうたに対して心底から愛情を覚えるようになった。明治三十五年一月にうたが亡くなった後赤彦はうたと共に過ごした日々のことを思いおこして「追懐の歌」を詠んでいるが、その中の

煙草買ふ銭乏しくてわびし朝隣に行きて煙草借りし妹
（明治三七）

の作などは、池田町での生活を想起して詠んだ歌であるといわれて

いる。

しかし赤彦がこの地でうたと過ごしたのは、そう長い期間ではなかったように思われる。教え子で、赤彦の許によく遊びに行ったという人たちがまだ多く生存していた昭和三十年代にもすでにうたについての記憶を存している者は殆どいなかった。窪田茂喜や教え子で後に画家となった寺島理吉（白山卓吉）の記した追憶記のなかにわずかに記録が見られる程度である。

赤彦は、明治三十二年の夏に池田町村の北に隣接する社村（北安曇郡。現大町市社区）の山之寺という部落に居を移した。この時には、うたと同居せず、赤彦はひとりであった。

山之寺は社村の南端の部落であり、それまで居住していた小学校附近の町場からは半里ほどの道のりがある。この集落から少し離れた田圃の中に、赤彦の生家の遠い縁者に当る横沢家が水車屋を営んでいた。それで、ここに下宿することにしたのである。

赤彦が横沢家に下宿することにしたのは、多分うたが妊娠して実家に帰す必要があったのと、この頃文部省中等教員検定試験（国語漢文科）の受験を思い立ったため、受験準備の場所を確保する必要があったからであろう。

明治三十二年の十一月下旬に赤彦は長野市に赴いて教員検定の予備試験を受験した。この時、二兄武彦が重態に陥ったとの急報を受けた。この兄は、明治二十三年二年生の学年末に長野師範を中途退学、その後電信学校を出て二十八年六月台湾に渡っていたが、病いを得て帰還、東京の佐々木病院に入院、治療を受けていたのである。赤彦は知らせを受けると、長野の郵便局に勤務していた長兄の泰蔵と相談、郷里の実父塚原浅茅といっしょに急拠上京することにした。しかし赤彦たちが病院に着いた時には、兄武彦の病気はすでに最後の段階に近づいており、医師からは再起の望みのないことを告げられた。赤彦と浅茅は、せめて武彦に最後の生活を郷里で送らせようと豊平村に連れて帰ることにし、上野駅で信越線に乗り大屋駅で下車した後は、武彦を輿に載せて郷里を目指した。途中丸子で一泊し、大門峠を越えて、豊平村下古田の家に着いたのは十二月二日である。兄は赤彦が池田に戻っていた同月二十四日に世を去った。

赤彦はこの月には友人の吉沢秀吉も失っている。

こうした悲歎のなかで大きな喜びとなったのは、翌明治三十三年に入って、二月十一日に、下諏訪高木の実家でうたが長男を生んだことである。このことは、赤彦夫婦にとってはもとより、久保田塚原の両家にとっても最大の喜びであったのは言うまでもない。生れた子供は、久保田家の代々の当主の実名から政の一字と赤彦の本名俊彦から彦の一字をとって政彦と命名された。誕生日が紀元節の日に当って殊にめでたいというので、赤彦の実父浅茅は、その意を含めて詠んだ祝賀の歌を短冊に記して久保田家に贈った。

二

師範生の時期には新体詩の創作に熱中して学業を省みなかった赤彦は、池田に赴任してからは、前述のように浪費的生活もしたけれども、校務をおろそかにすることはなく、教育の方面に多くの力を注いだ。これは教育者の家筋である久保田家の養嗣子となり、教員として世に立つことになった身としては、当然の変化であろう。と同時に、師範学校の最終学年に師範の附属小学校で行った教育実習の体験をも無視することができない。

教育実習は、師範学校の生徒が小学校の正教員としての資格を得るために必ず行うように義務づけられている教育の現場における実

習である。赤彦の在学した頃の実習は期間が長く、一年間の長期にわたるものであったらしい。赤彦は、この一年間に教育の現場に出た際必要なさまざまのことを学ぶと共に、教え子に対する深い愛情を体得したのである。教え子のなかには師範学校の校長の子で、後に医者としてよりも俳人として名の知られた正木不如丘もいて、赤彦は特別に可愛がったという。それで、師範を卒業したときもこれらの教え子と別れがたい気持が強く、小尾喜作によると、赤彦は師範の卒業式をすませて郷里に帰る途上、東北信地方と諏訪地方との境を区切る大門峠の頂上まで来ると、帽子をとって手に持って振り、遥かに長野にある教え子たちに別れを告げたと伝えられているほどである。

赤彦が勤めることになった池田の小学校は、この地域での大校であり、尋常科四年の上に高等科が四年までありさらに補習科も設置されていた。通学圏も広く、尋常科は隣村の会染村を含み、高等科は山間の村々にまで広がっていた。明治三十一年四月、赤彦が赴任した時の校名は、池田尋常高等小学校であるが、この年の六月一日からは会染村との組合立の学校となり、池田会染尋常高等小学校と改称された。

赤彦は赴任した明治三十一年は高等科一年生の男子組を担任した。大校とはいっても明治のことであり、学校の設備なども貧弱で、冬期になっても教室内の暖房としては火鉢が二つ置かれているだけであったという。師範新卒の赤彦の教育における実践活動はこのようななかで開始された。

赤彦が教育技術の面ですぐれた手腕を有していたことは多くの人が語り伝えていることであるが、何よりも生徒の心を強くひきつけて離さない魅力をもっていた。窪田茂喜は、「先生の、白皙で上品な澄み徹った男性的の御顔は、深味のある太い線ではつきりと私の胸深く刻みつけられて居る。濃く太い眉と二重瞼の澄んで大きい眼とは、殊にはつきりと私の記憶に残つて居る。底に微笑と温味とを潜ませて「オヽ」と大きく息を吐いて、一ぱいに見開いた眼で対手を見据える様子は、何人をも惹きつけずにはおかぬものであつた。そして笑ひに綻びて行く顔は、何とも言ひ得ない美しく明るくなごやかなものであつた。其処に矢張り先生の人柄が出て居るのである。」と回想し、また、「先生に接するものは、先生の男性的な公明さと慈愛に充ちた温情とが、渾然として交響す高い人格に惹きつけられずには居られなかつた。先生は真情流露である。開け放しである。詐る事がない。飾る事がない。内に持つものをその儘に発露すると云ふ風であつた。」と記している（前掲「島木先生を語る」）。

赤彦が力を入れたのは、訓育の面であり、特に野球の練習を通して生徒の心身を鍛錬することに努めた。むろん野球はまだ普及していない頃のことで用具も整っていなかった。補手がミットを持っているだけで、他は素手で皮のボールを受けたという。練習を始めた当初は近隣の学校と試合をしても及びもつかなかったのが、激しい練習を連日繰返して、ついには強豪松本の開智学校をも倒すまでになったといわれる。

赤彦は他校に出かけて試合をするときなど、いつの頃からか明らかではないが、試合の前後に自分の作詞した「野球のうた」を歌わせて選手を鼓舞した。その歌は、

赤と白とにいでたちし
九人の選手の勇しや
さけたる指に血を流し

いためし肌を日に曝し
学の庭にきたへたる
手並を今日ぞ試すなる

から始まって三番までのもので、「硝煙みる〳〵」の節で歌わせた。二番の歌詞に、「勝負は互の時の運／あとは笑ひて別るなる」とあったり、三番の歌詞に、「敵も味方も日の本の／国に生れし男の子なり」「きたへみがきて国の為め／末は尽さん諸共に」などとあったりするのは、日清戦争後の時代を反映するものであろう。

翌明治三十二年の新学期からは担任替えとなり、高等科の三年生を受持つことになった。この年度に入ると、赤彦の教育に対する情熱はさらに高まってきたように思われる。窪田茂喜は新学期から代用教員に採用され、師範学校の受験準備のため続いて赤彦の指導を受けることになったが、職員としての立場から見た赤彦について、「池田小学校に於ける先生は、職員と生徒との仰慕の中心であつた。」（前掲「島木先生を語る」）と回顧している。師範学校出身の教員が稀少で、高い権威をもっていた当時のこととはいえ、赴任後一年にして赤彦がすでに校内においてこのような位置を占めるにいたっていたのは、その教育に傾ける情熱が、同校の職員、生徒の誰もの目に、ひときわけざやかなものとして映っていたからにちがいあるまい。

じじつ赤彦の教育に対する識見とあふれるばかりの情熱は、この年十月に同校の職員でつくっていた『小天地』第三号に掲載した「我校弊ヲ論ジテ同人諸士ニ訴フ」と題する論説や、担任の生徒についての記録『生徒経歴簿』の記述によって、十分にうかがうことができる。

赤彦は右の論説のはじめに、「短所ノ暴露ト進歩」「我校ニ対スル研究ヲ起セ」「主張ナキ親密ト腐敗」「研究心」「五時間ノ授業ト疑問」「職員会ノ寂寥」「社会ニ対スル交際」「学校ノ威厳」「殊ニ校長ニ望ム」「生徒ニ対シテ」「絶対的威厳ト真正ナル従順親密」「一時的従順ト「意気地ナシ」」「未来ノ希望ヨリ生ミ来ル活動ト現在的活動、即チ卒業後ニ生クル教育ト、在学中丈ケノ教育」「盛大ナル野球ハ学校ノ外観ヲ衒フ為メニ非ズ」の十四の項目を列記し、以下、親密和合をもって称せられ、みずからも許している同校の現状に対してきびしく「苦言」を呈すると共に、自己の短所への反省の上に立って、その改善の勇気を持つべきことを訴えている。特にこのなかで、「未来ニ生キザルノ教育ハ、其外観如何ニ美ヲ呈スト雖モ、到底死物タルヲ免レズ。」と述べているところなどには赤彦の教育観があらわれており留意されるのである。

『生徒経歴簿』は赤彦が明治三十三年同校を去る際に整理した担任の生徒各人についての記録である。次に冒頭の一例を引いておこう。

○○○○

本　籍　○○村字○○（○○○番地）
生年月　明治十九年三月
家　族　父　存在
　　母　継母（実母　明治二十七年死去）
　　祖父母　共に存在
　　兄無　姉無　弟一人　妹無
　　其他
入　校　明治廿二年四月○○学校ヨリ転校
体　格

良　身幹偉大

過去ノ疾病

学　力

級中ノ最優等ナラム　数学数理及ヒ作文等ハ彼ノ最モ長所トナストコロ　高等三学年第四期試験ノ際ノ如キハ修身一題ニテ六枚余ノ答稿ヲツクリ　而モ条理明晰議論正確ニシテ余ヲ一驚セシメキ　嘗テ同級会ノ際ニ彼レ議ヲ提出シテ曰ク算術ノ時間隙多キニ堪エズ　願クハ他ノ書物ヲ繙クノ自由ヲ得シメラレン事ヲト　斯ル結果ヲ見タルハ教師ノ不心得大ニ其責アレドモ　抑モ又彼レノ数理的思想已ニ衆中ニ超絶セルヲ知ル可シ　彼レノ作文ヲ作ルヤ思想滾々筆忽チ章ヲナシ　カツテ石盤上ニ原稿ヲ試ムルコトナシ　サレバ時々文句ノ錯綜アリテ教師ノ注意ヲ受クルアリシモ　一方ヨリハ成程カノ如キ長文ヲ一時間内ニ成就スルニハ　石盤上ニテハ迚モ間ニ合フマジト察シタリキ

只　美術的ノ製作ニ至リテハ　最モ(彼トシテ)劣等ニシテ　習字、図画、唱歌ノ如キハ彼レノ常ニ不得手トスル所ナリ　三学年第四期試験ノ如キハ　唱歌点40キリシタメ　平均90以下トナレリ

性　格

級中最長最大ノ児　卒然トシテコレニ臨メバ漠然トシテ愚ナルガ如ケレドモ　ソノ情意共ニ衆ニ超越シテ　小児トシテハ最モ明晰ナル見識ヲ持シ　独処独行敢テ他ノ喧騒キカザル如キハ　ヤヽ大人ノ風ヲ備ヘタルモノト云フ可シ　彼ハ極メテ寡言ニシテ　平常語ヲ発スルヲ見ザル所　ムシロ沈思黙行ノ姿アリト雖モ　一旦議論ノ衆生間ニ起コルニ及ンデハ　滔々自己ノ意見ヲ述ベテ　縷々絶ユルコトナシ　修身的説話ノ際最モ真面目ニ最モ熱心ナル傾聴者ハ必ズ彼ナリ　級風ノ衰頽ヲ憂ヘテ　卒先言ヲ衆ニ進ムル者モ必ズ彼ナリ

寒中　足袋ヲ着ケズシテ一里ノ山路ヲコエ蓬髪粗衣知ラヌ顔ヲシテ　ノソ々々教場ニ入ルノ態度ハ　軽薄ナル当世少年中蓋シ弥トス可キモノナラン

嘗テ教場ニテ教場ニ嘔吐ス　ソノ量多大ニシテ　滔々板敷上ニ落ツルヤ読本ヲ以テコレヲ蔽ヒツヽ猶傾聴ヲ持続セシ事アリキ　意志ノ強キ事呆ル、ニタエタリ

彼ハ頻リニ中学ニ行カンヲ希望スレドモ　父コレヲ許サヾル由　ヨシ中学ニ進マズシテ将来実業ニツクモ　必ズ人後ニ落ツルノ風ニハアラザル可キカ

彼ニ対シ注意ス可キハ　アマリ早ク大人ラシクナラヌ様仕向クルニアラント思フ　早ク大人ニシテ仕舞ヒテハ最早発達ノ目途少ケレバナリ　感情ノ激シク起レルトモ　若クハ熱心ニ思考スルトキハ　鼻血ヲ出ス癖アリキ

明治卅三年一月

学力性格前記スル所ト大差ナシ　彼ノ大人気ドリハ益々傾向ヲ多ニス

図画習字稍々進歩セリ　頗ル事トスル所ニ熱心ナリ　一里余ノ通学距離寒暑ヲ意トセズ皆勤ナリ

去ル十二月中旬ヨリ英語ノ課外授業ヲ始ム　始メテ講ヲ開クヤ　級中略ボ三分ノ二ヲ占ム　而シテ二月中旬僅カニ七八人トナル　当時日短カク寒甚ダシケレドモ　彼レハ終始一日ノ如シ　以テ其意志ヲ知ルベシ

訓育の面では前年度に引続いて野球の練習に時間を割いた。赤彦自身、身体の鍛錬につとめ、冬になると社村の下宿から学校までの半里の雪道を素足で登校したので、生徒たちも感化されて素足で通学したという。「安曇野の厳冬の朝夕を襟巻なしの素足で学校へ往復されたものであつた。冷たく澄み切つた朝の大気の中に白い息を吐きながら、赤い冷たさが骨までしみ通つた素足を大股に運んで、胸を張つて登校される颯爽たる姿は真に快いものであつた。先生の周囲には大勢の生徒達が同じ色の素足を忙しく動かしながら、先生にひき添ふやうにして、ついて行くのであつた。この光景は今もは

つきりと思ひ起す事が出来る。私自身も素足で冷たい冬を通したものである。」(前掲「島木先生を語る」)と羅田茂喜は記[2]している。

明治三十二年の夏に文部省中等教員検定試験の受験を志して準備をはじめたことはさきに触れたが、次にこのことについて述べると、赤彦は師範学校の同級生であった矢島音次に宛てて八月十五日に送った書簡でその意思のあることを明らかにしている。即ち、「汝ト別レテ已ニ幾許ゾ世事握捉茫トシテ夢ノ如シ千巻ノ書ヲ読破シテ千古ノ大人ト語ルコレ寧ロセメテモノ腹イセトス可シ　独リ北安ノ無人郷ニ森林ヲ侶トシ仙人的子供ヲ友トシテ高瀬河畔ニ隠ル、ノ我ニ至リテハ　真個慰藉ス可キ所以ヲ知ラザルヲ如何　有明山ノ白雲我ガ詩嚢ヲシテ重カラシムルニ足ラズ　池田ノ美人瑣以テ我ニ適スルナシ　今日ノ余ガ境遇ハ今ヤ余ヲ駆テ読書熱ノ急流ニ投ジツ、アリ」報じ、「余ヤ来ル十一月文部ノ検定ニ出ル積ナリ　笑フ勿レ〳〵余と近況を豈ニ一片ノ免状ヲ欲シテヨダレヲ試験委員ノ膝ニ垂ル、者ナランヤ而モコレニヨリテ得ル勉強ハ実ニ余ニトリテノ一大階段ニシテ若シ免状ガトレレバコレモ亦有難キ仕合ナリ」と記している。

しかるに明治三十二年は、赤彦の上に不幸の相続いておこった年であった。年末に二兄武彦や友人吉沢を失っているだけでなく、この受験勉強の最中にも二人の教え子の死に相継いで遭った。

七月十六日土曜日の午後、学校から生坂村(東筑摩郡)の生家に帰る途中、担任の生徒藤沢経市が犀川で水泳をし、誤って溺死した。この日赤彦は野球の選手を連れて大町小学校に出かけており、帰ってから経市の死を知った。赤彦は翌十七日に生坂村に赴き、藤沢家を弔問し、八月三十日に行われた葬儀には同級生徒五十余名を引率して会葬し、涙ながらに弔辞をよみ経市の冥福を祈った。

この間、赤痢が流行しはじめこれに罹病した生徒の北条伝が余病を併発して八月二十五日に亡くなった。伝は広津村(現池田町)の小学校から池田の高等科に進学してきていた生徒で、赤彦の最も愛情を注いでいた一人であった。伝の父に宛てて、同月二十八日、赤彦は「天禀の御怜質六十余人の生徒中特に伝君の将来には望を嘱し居り候処不図の御災難真個落胆の外無之候帰校の途上中学校入学の事など語り合ひ明年は是非など小生も御勤め申候時斯く果敢なき御末期ならんとは思ひがけきや凛乎たるその眼猶眼にあり思へば只夢の心地に候学問優等なる生徒は世間いくらも有之候人物高尚にして後来の有望なる伝君の如くにして今日の凶聞ある実に浩嘆の至りに不堪小生も今年四月より受持の任にあたり只管級の成績上進に尽力罷在候処図らざる御訃聞真個落胆仕り候」(北条伝次郎宛書簡)とかき送り、哀悼の真情をあらわしている。

むろん赤彦は、この間も検定試験を受けるべく準備は続けていた。伝の死からほぼ一か月経った九月二十一日に矢島音次に宛てた書簡では、「赤痢軍の襲来にあひて二週間の閉校となりぬ客舎の二階にこもりて大に節を読書に折らむとす　昨端書来り貞一[3]の学校も閉鎖したれバ明池田に入らむことを報ず　定めて大騒ぎとなるべしわれ今月に至りて大鏡六〇〇頁(残り二〇〇頁)倫り十回講義八回までを調べぬ　どうでせうねえ」などと記し、準備の進捗の様子を伝えている。しかしながら中等教員の検定試験は相当の難関であり、国漢の学力には多少自信をもっていたとはいえ、中等学校である師範学校を卒業後一年半にしかならない赤彦が、いかに努力したとしても、これに合格できる可能性はかなり小さかった。殊に相継ぐ生徒の死に逢い、精神の動揺に加えて時日も空費する状態のなかでは、合格を期待するのは、まず無理であったといってよいであろう。

赤彦は先述のように十一月下旬長野市に赴いて検定試験の予備試

験を受験した。しかし、結果は果して不合格におわった。

教員検定試験の受験が失敗におわったとはいえ、受験のために赤彦が和漢の古典の勉強に打込んだことは、やがてその将来の活動のために教養を培ったことになり、自らに益することが多大であったであろう。しかも受験の失敗は、赤彦の気持の持ち方にある変化を与えないではいなかったように思われる。即ち、後で引くように、夏頃には作詩歌詠のことは今日自分の全力を注ぐべきことではないといっていた赤彦は、この頃から、次第に詩歌の制作へも関心を移してくるようにみえるのである。

三

では赤彦は、文芸の方面においては、池田の時期にいかなる活動をしたのであろうか。池田における赤彦のこの方面での活動は、教育の面に比すれば、活発なものではなかった。池田に赴任した明治三十一年は特に停滞がはなはだしく、殆ど作品をのこしていない。

赤彦が詩歌への関心を失ってしまったのでないことは、同僚が歌会を催したときには参加したといわれているし、松本町に出て、師範の時の同級生太田水穂の宿を訪問した際などには、詩歌についても白熱した議論をたたかわせたと伝えられていることから容易に推測できる。

しかし作品をのこさなかったのは教育に力を注いでいたことのほかに、他にも理由があったのではなかろうか。即ち赤彦は、今後自分が詩歌の上においてどの方向を目指すべきか、さだめかねていたのではないであろうか。師範生の頃に作った赤彦の作品は、主として新体詩であった。それはすでに指摘されているように、青春の情熱の赴くままに一気呵成にものしたというごとき作品であった。他家の養嗣子となり、実社会の空気に触れた赤彦には、今やそのような方法で詩歌を作ることは不可能になっていたのである。

赤彦は三十二年の前半にも詩歌の作品をのこしていない。

こうした行きづまりのなかで赤彦が自覚したのは、いまの自分のなすべきことは、詩歌の創作ではなく、他にあるということであった。矢島音次に宛てた書簡のなかで、「翻テ自ラ考フ我性徒ラニ疎、事ヲ好ミ遠ク慮ラズ猥リニ児戯ヲ喜ブ　須ク自己ノ修養ヲ勉メ節ヲ苦学ニ折テ後来ノ大成ヲ期スベシ　作詩歌詠ノ事到底今日ニアリテ全力ヲ注グベキニアラズ　コレ畢竟自ラノ詩ヲ殺ス者ナリト」（明治三二・八・一五）と記している。自己の修養があってはじめてすぐれた詩歌を作り得るという赤彦の生涯を通ずる考え方がここにあらわれていて注目されるのであるが、中等教員検定試験の受験のための勉強をはじめたのもこのような自覚にもとづくものであったろう。

しかし、三十二年の後半に入ると、赤彦は多少の作品をのこしている。それは師範生の時期に多く作った新体詩ではなくして、殆どは短歌である。それらの詩歌のうち主要なものは、翌三十三年の三月二日に友人の城下清一に送った書簡の中に「昨年に於ける余が日記中の物」として記録されている。

落日故人情

人なき庭に佇みて　ひとり思ひにしづむ時
かかるもうしや久方の　雲の旗手の天つ雁
人の世遠き雲井にも　吹かぬ隈なき秋風を
よわき翼につつみかね　鳴きても行くか天つ雁
旅より旅の身にあらば　汝も故郷に親やもつ
あはれはおなじ身の上を　いたくななきそ天つ雁

悼教子溺死

川のべの残りし衣に取りすがりひづち泣くらむちちははらはもいとせめて取りすがりてもなげくべしからをだに見ぬ親ぞ悲しき

今よりは池田の道を立ちて眺めゐてながむとも子のかへらめや

悼教子死

大みねの山立別れゆく雲をなれにたぐへて見るぞかなしき

まり投げて遊べる庭にきのふ迄見えし姿はををしかりしを

秋風のことしはいかに身にしみて教の庭のさびしからまし

悼亡友吉沢兄

へだてなき友がおくりし文をさへ疑ふばかり驚かれつつ

世の中に君がのこしし怨さへ聞かで別れし事を悲む

かくしつつ誰も行くべき道なれど一日先立つ友をこそなげけ

悼兄死

願くは只やすらかに眠りませゆきけん魂に幸ありぬべく

さむしとも早やのたまはず新しきおくつき所雪はふれども

これらの作品は、はじめの一篇が新体詩であるのを除いてすべて挽歌であり、明治三十二年の後半に赤彦の身辺に相継いでおこった悲傷事を反映している。それぞれに死者に対する哀悼の情があらわれていて、空疎なものは感じられない。このように痛切な体験から赤彦の歌口がほぐれてきたことは、やがて生まれるべきその歌の性格を予測させるものであったといえる。即ち赤彦は、今後、作歌において、実情、実感を重んずるようになっていくのである。

ところで、これらのうち、「悼教子死」は北条伝の挽歌である。伝の挽歌は、このほかにも作られており、赤彦が、伝の死後、伝の父北条伝次郎に宛てて差出した書簡のなかにも次の五首がみられる。

なれを見ぬ二十日のほどもながかりきいくよをかけて今はたのまむ

打笑みてかたりしことを今さらにゆめになさんと思ひかけきや

いとせめて夢路にだにもかよへかし天かけるてふ魂し残らば

なきころとおもひつつ猶朝にはなが来しみちを眺めこそやれ

雲井まで名のりあぐべき音をすてて死出の山路に入るほととぎす

さて、前掲の歌を通読して気づくのは、措辞、声調などの面において、万葉集の影響が認められることであろう。この傾向は三十二年から三十三年に進むに従っていっそう顕著になってくるように思われる。そして三十三年の四月に赤彦が池田会染小学校の『同級会雑誌』に発表した北条伝の挽歌は、次のごとき万葉集の影響のいちじるしくあらわれた大作であった。

弔生徒北条伝歌並反歌

大峰に　雲こそかかれ

裾野原　露こそ結べ

その露の　ちりぬるごとく

其雲の　あとなきがごと

うつしよを　そむきし汝れは

ははそはの　母が手さかり

父のみの　父が目かれて

いかさまに
死出の山
学びやに
人の道
まつぶさに
ますらをの
ひたすらに
春の日の
秋の日の
ぬば玉の
ともし火を
いそしみし
生先の
伝なれ
いつしかも
すめろぎに
ますらをの
いすくはし
まちまけし
たのめにし
はしきやし
一日だに
ひとひだに
手にもたる
めで来にし
ことわきて

思ひ立ちつつ
ひとりこえけん
ありけんほどは
まなびのおくが
きはめあきらめ
をのこの手振
つとめいそしみ
くるる思はず
早きをかこち
よるの窓には
かかげ尽して
なれにしあるを
しるき二葉の
わが教子は
世に立ちいでて
つかへまつりて
わざかとぐらん
名をかあげんと
ことはあだかも
ことは夢かも
なれがおもわは
見ねばわびしく
見れば慰み
玉とおもひて
事かなしきを
言はんもうげく

鶉なす
膝の上に
おほしけむ
こいまろび
くやしみか
かなしびか
行くものは
かへらぬは
ひさめ降る
諏訪のうみ
なぎさべに
糸たりて
なれはしも
子等遊ぶ
まりなぐる
とこしへに
そこ故に
そこゆゑに
おくりこし
うづらなす
ぬえこ鳥
甲斐なけれども

はふ子はぐくみ
いだきかきなで
うみのみおやは
足ずりしつつ
こひてなくらん
なきてこふらん
瀬々の水かも
人の魂かも
五月の空に
なれとこぎけん
船はあれども
いさなつりけむ
とはにかへらず
学のにはに
友はあれども
汝の見えめや
心を痛み
おもひしなへて
柩の前に
いはひ伏しつつ
音をこそなげけ

反歌

大みねの山たちわかれ行雲をなれにたぐへて見るぞ悲しき

なきものと思ひつつ猶あしたにはなれにし道を眺めこそやれ

なれを見ぬ二十日のほども永かりきいくよかけてか今はたのまむ

雲井まで名のりあぐべき音をすてて死出の山路に入るほととぎす

いとせめて夢路にだにもかよへかし天かけるてふ魂し残らば

秋風のことしはいかに身にしみて教の庭のさびしからまし

万葉集の歌人柿本人麻呂の作に倣ったものであることが一読して明瞭であろう。

赤彦がなぜこの時期にこのように万葉調の歌を詠むようになったのか、このことは歌人赤彦における一つの問題であろう。

その理由として挙げるべきは、正岡子規の影響ということである。

子規が万葉集を範として和歌を革新すべく新聞『日本』に「歌よみに与ふる書」と「百中十首」を発表したのは、赤彦が池田に赴任した明治三十一年である。赤彦はこの頃まで子規とさしたる関係がなかったけれども、明治二十八年に『日本』に新体詩「海国男子歌」を発表しているし、二十九年に『青年文』に載せた新体詩「つなみ」は子規の目にとまって好意的な批評を受けているので、子規の活動には、早くから関心を払っていたであろう。子規の和歌革新の提唱も、当時『日本』が長野県内に広く読まれていたことから知る機会があったものと推測される。しかも明治三十二年の夏以後社村に下宿してからは、師範学校の先輩で、日本派の俳人であった矢ケ崎奇峯（栄次郎）が大町小学校の教員として同村内に住んでおり、二人はしばしば往来、親しく交っていたのである。奇峯を通しても子規の活動について聞くことが多かったに相違ない。

こうして子規への関心を深め、その主張に共鳴するにつれて赤彦が子規の影響を受けるようになるのは、自然のなりゆきであろう。「悼教子溺死」をはじめとするさきの挽歌には、すでに万葉集と子規の歌の影響を看取することができる。このようにして、「作詩歌詠」のことには心を向けまいとしていた赤彦も子規が和歌革新の運動をさらに拡めるべく明治三十二年の暮から『日本』紙上に短歌募集[4]をはじめると、その二回めの課題「森」に応募[5]するまでになった。十四首投稿したなかから一首が入選している。

藍比尼の林の中に光満ちてあもりたまひし釈迦牟尼ほとけ

この歌は『日本』の二月十八日の紙上に百合[6]の筆名で掲載されている。

もっとも赤彦が子規の主張に共鳴し、影響を受けたといっても、この時点でその主張をどの程度まで深く理解していたかについては、疑問の余地がある。たとえば子規は、写実主義の立場から、「森」の題で短歌を募集するに当って、次のように注意を促していた。

一、森は木の多き処をいふ。林といひ木立といふも亦妨げず。

一、題を森と定むるも必ずしも森を主として詠めとにはあらず。他に主眼の事物を置きて森を副物とするも亦妨げず。

一、四季雑いづれにても随意。

一、歌の数を限らず。

一、古歌を探りて老曾の森おほあらきの森などいふ事を拈出するは拙し。実際に森を見森を行く時の景色感情を詠むべし。

机に向って歌書を繙くの暇あらば杖を携へて森の小道を逍遥するに如かず。実地に森を見森を行かば、其時森に配合すべき周囲の光景（家、村、川、山、野、塔、鳥、紙鳶の類）を見廻し、森の中にある種々の小景（下草、墓、祠、寺、鳥獣、番小屋等の類）を見定め、森といふ者の感じを十分に胸の裏に収めて後、家に帰り、再び前の光景を眼前に浮べながらあそこここを捉へて幾首も詠むなり。十首十五首と詠む内には少くも一首二首の名歌あるべし。僅に一首二首詠みたらんは多く拙きものなり。

一、期限は一月卅一日迄。

一、封筒には短歌在中の旨記す事。

作歌に当って赤彦が子規の要求に留意したであろうことは、当時の赤彦としては大量といえる十四首の歌を投稿していることなどからも推察される。しかし、赤彦は「藍比尼の――」の歌においては、「実際に森を見森を行く時の景色感情を詠むべし。」という要求にはこたえていない。一首の例をもって速断するのは避けなければならないけれども、赤彦は、あるいは万葉集の歌を範とすべしという子規の主張には共鳴しても、その写実主義の立場に対しては、必ずしも理解が十分ではなかったのではないかとも考えられるのである。

赤彦が万葉調の歌を詠むようになったのは、子規の和歌革新にかける情熱に動かされたことが大きく作用しているであろう。新しい教育の実践に力を傾けようとしていた赤彦の心に、子規の情熱は強い共感を呼びおこすものがあったのである。そこに生まれてくる赤彦の歌は、まず男性的な万葉調の歌でなければならなかったであろう。

このようにして、この時期に赤彦は万葉調の歌を詠むようになった。そして、「弔生徒北条伝死並反歌」のごとき大作をも作ったのである。赤彦は十四首投稿したなかからわずかに一首が入選するという思わぬ不成績に反省を余儀なくされ、以後は募集には応ずることがなかったらしいけれども、しかし、ひそかに子規の歌論と実作を学ぶことにつとめ、やがて、万葉調歌人として活発な活動をすることになるのである。この意味において、池田の時期の歌人赤彦における意義は、重要であるといわなければならない。

赤彦が師範卒業後最初に赴任した池田の地を去ることになったのは明治三十三年五月である。転任先は郷里諏訪郡の玉川尋常高等小学校であった。実家では二兄の武彦の死亡後、実父塚原浅茅の健康がすぐれないのに長兄泰蔵は長野市にあってつとめをもっており、実家の面倒をみる者が他にいなかった。それで転出を希望し、実家近くで、かつて授業生としてつとめたことのある玉川小学校への転任の運動をしていたのが実ったのである。

赤彦は五月二十五日の午後告別式をおえると担任していた高等科四年の生徒に送られて池田を離れた。学校の傍らを流れる高瀬川の堤上を生徒といっしょに一里歩き、高瀬橋の上で記念撮影をし、そこで生徒に別れを告げて馬車に乗った。この時の惜別の詩「橋上人語」（後「橋上」と改題）は、年末に『文庫』に掲載された。また短歌「池田の里を出づる時」は翌年一月の『諏訪文学』に発表されている。

うるはしき池田の里に三年すみて只一朝に別れきにけり

子等に別れ道へだたれる夕暮を心泣きつつ車にのりけり

これらの歌には子規の教えに従い実感実情をもって作歌しようとする赤彦の姿勢が池田の時期よりも明確にあらわれているのを認めることができるであろう。

玉川小学校に移ってからの赤彦については、改めて詳しく考察してみたい。

注

(1) 長野師範の附属小学校で教生をした時、担任したクラスの生徒。

(2) 窪田はこの引用文の前に「先生は池田へ来られた当座（家庭を持たれるまで）町から半里ばかり離れた野中の一軒家に住まれた。その冬――」と記し、赤彦が社村の横沢家に下宿した時期を池田に赴任した明治三十一年春のこととしているが、これは記憶の誤りで、正しくは本文中に記したように明治三十二年の夏である。

(3) 太田水穂の本名。当時の筆名は、みつほのや。この年六月から東筑摩郡和田尋常高等小学校に訓導として勤務していた。

(4) 子規が第一回めの短歌募集の記事を新聞「日本」に掲げたのは、明治三十二年十二月四日である。課題は「新年雑詠」で、締切日は十二月二十日であった。この時の入選者には伊藤左千夫（三首）、香取秀真（三首）、うつほのや（窪田空穂、一首）などのほか、赤彦の長野師範の後輩矢野一二（三首）もいたが、赤彦は応募していないらしい。

(5) 赤彦が第二回めの短歌募集に応募した理由としては、時期からみて、中学教員検定試験に不合格となったり、二兄武彦の死に遭ったりして気持に変化があったこと、また、第一回めの短歌募集に応じた矢野一二の入選歌が明治三十三年元旦の「日本」に掲載されたのを見て刺戟を受けたこと、などのことが考えられる。

(6) 新聞『日本』には百合という筆名で掲載されている。これは多分誤植であり、山百合とあるべきところであろう。赤彦がこの頃よく用いた筆名は山百合で、百合を用いた例はない。